

中国はなぜ成長し、
どこに向かうか、
そして日本は？

和中清
Kiyoshi Wanaka

まえがき

なぜ中国は世界に類を見ない速度で成長し、今日の姿を築けたのか。その理由を考えるには、政治、経済、歴史、社会文化的な考察も必要である。

「13億人の市場経済社会」は世界に例がない。先進国や日本の経験で推し測ってもその実体には迫れない。中国の事情を理解した考察が必要である。

本書では、中国の成長要因を「思想と理念」「政治と指導者」「中国社会の風土と中国人」「中国経済」の4つの側面で見え、12の項目にまとめた。「思想と理念」は指導者の思想、考え方で他の項目を支える基礎である。「政治と指導者」では政治の進め方と巨大人口を率いる指導者の統率力がどう成長に影響したかを考えた。「中国社会の風土と中国人」では社会風土や成長の担い手としての中国人をクローズアップした。「中国経済」では経済戦略や経済運営がどのように成長へと導いたのかを考えた。

筆者が中国と関わりを持ったのは1991年である。以後、毎月ほぼ欠かさず日本と中国を往復した。その30年、中国で過ごした時間は日本より多い。成長要因で取り上げた12項目は、

自ら多くの人に接し、各地を訪れ変わる都市や農村を見続けた30年のまとめでもある。本書は先行して中国で出版されている。韓国、東南アジア、さらに欧州での出版も予定している。

その読者の感心の多くは「なぜ中国は成長したのか」とともに「これから中国はどこに向かうか」にあると思う。折しも2017年秋の中国共産党第19回全国代表大会で、習近平主席は中国の新指導理念「習近平新時代中国特色社会主義思想」を発表し、「新時代」がクローズアップされている。「新時代」とは何か、「新時代」に中国がどう変わり、どこに向かうのか、これから中国がどんな経済運営を行い、そして成長が続くのかどうかを第2章で述べた。

筆者はこの30年、自身も中国で事業を行い生身の中国と向き合ってきたと自負している。都市だけでなく多くの農村も訪れ、中国の変化を自身の眼で見続けた。中国が「なぜ成長し」「これからどこに向かうか」を語ることは使命とも思っている。

成長要因の中で第一の要因に掲げたのは「中国の平和主義」である。それが成長の「要」の役割を担ったと考えている。「平和主義」があつてこそ、政治も経済も国民生活も安定し、驚異の成長を成し遂げたと思う。「平和主義」に徹したからこそ、中国は世界で認められ、存在感が増し、成長を導いたと考えている。

だが、日本や米国では「中国の平和主義」への異論も多い。筆者が「中国の平和主義」を語れば、日本での反発や攻撃も予想される。そのため、「中国の平和主義」を語るなら、それに対す

る異論を誰が、なぜ起こすのかにも答えねばならない。中国の成長の第一要因に「平和主義」を掲げる以上、その異論には反論しなければならぬと考える。またそれを述べることで、成長要因への理解も深まると考えた。

なぜ「中国の平和主義」に異論が出るのか、筆者はそこに日本の右翼政治家や知識人の情報操作があり、その結果としての「緊張」「対立」の政治利用と米国の動きがあると考えている。だから第3章では、日本の右翼の反中活動の実態について記述した。右翼により中国情報が歪められ、右傾化の反中世論が形成され、政治に利用されている実態を理解していただきたいからである。また米国による中国との対立への動きとそこに隠された欺瞞についても記した。

また中国の成長を振り返り、そこに日本が忘れ去った良さが多く存在することに気づいた。中国の成長要因と日本の衰退要因は不思議なほどに符合する。その喪失は日本が衰退し、さらには没落に向かうかも知れない原因と考え、それを取り戻すことで日本は、再び浮上する。そこに手を付けないかぎりどんな経済政策を取り入れようが、日本の再生はないと考え、第4章にまとめている。

第3章、第4章を読まれた読者には厳しい日本批判に反発を覚える方もおられると思う。

中国を肯定し、日本をことごとく批判することに「何を言うか」「クソッ」と反発される方もあると思う。だが、恥部を覆い隠し「世界に誇れる日本」ばかり追いかけていたのでは日本は

蘇らないと思ひ、大きな反発も覚悟で第3章、第4章を記した。

今、筆者は非常に焦燥感を覚えてゐる。中国と関わり始めて30年になる。まさに中国の成長を目の当たりにしてきた。そしてこの著を書いた。なぜ中国が成長したのかを考えれば考えるほど、日本との違い、日本の問題が鮮明に浮かび、焦りと虚しさ、そして怒りを覚えた。その怒りをこの著に込めている。今こそ日本がそのほんとうの姿、現実に目を向けなければ永久に日本は変わらない、それどころか没落にさえ向かうという怒りである。

改革開放で中国は大変化を遂げた。30年前はまだ皆が共に貧しかった中国。上海の街も北京の街も自転車の洪水だった中国。しかし今はそんな中国に学ぶべき時代にすらなっている。それがグローバル社会の厳しい現実である。日本は過去をいつたん忘れ、今は素直に中国の成長に学ぶべきだと思つてゐる。

人間誰しも過去を忘れ、思ひ出や栄光を捨てることには抵抗がある。しかし過去の自分を捨てない限り新しく生まれ変わることはできない。皆が共に貧しかった中国、しかも13億人の国が奇跡の成長を成し遂げた。そこには学ぶべきことや戦略や戦術、物事の考え方など良いことも多くある。

中国の成長要因を考えながら日本を想ひ、消えた力、活力がみなぎっていた日本を呼び戻したい。そんな気持ちに本書を読みながら共感していただければ嬉しい。

目次

まえがき

.....

002

第1章

中国はなぜ成長したのか

思想・理念から考える

1 平和主義

.....

014

思想・理念から考える

2 市場経済と対外開放

028

思想・理念から考える

3 科学技術の発展

036

政治と指導者から考える

4 政治の安定

051

政治と指導者から考える

5 指導者の理念

059

政治と指導者から考える

6 戦略の強みと大胆さ

073

中国社会の風土と中国人から考える

7 社会の風土

081

中国社会の風土と中国人から考える

8 農村の安定と農民工の貢献

097

中国社会の風土と中国人から考える

9 中産階級の拡大と巨大市場

101

中国経済から考える

10 住宅建設と需要

111

中国経済から考える

11 経済運営の巧みさ

118

中国経済から考える

12 上海の役割

139

第2章

新時代とは何か、
中国はどこに向かうか

- 1 2020年後のリスクを考える 146
- 2 新時代とは 162
- 3 これからの中国経済 189

中国の平和主義を 誰が貶めているのか 〜日中友好のために〜

- 1 対立を仕組む情報操作と誤解 224
- 2 「中国の脅威」の政治利用 241
- 3 日本会議と右翼政治家 253
- 4 歴史修正主義教育 260
- 5 友好を破壊する靖国神社 269
- 6 南沙諸島への米国の介入 274
- 7 尖閣諸島の対立 281

第4章

なぜ日本は衰退するのか

1	「政治の軽さ」と「まじめさの喪失」	304
2	「アジアの矜持」を持ってない日本	314
3	借金漬けの日本	320
4	戦略欠如	326
5	内に籠る社会風土	335
6	成長市場への関わりの遅れ	350

あとがき

.....

362

参考文献

.....

366